

## 戦時下の私

荒井 慧 鹿沼市

大正時代、関東大震災のころ、世界に広がった経済大不況は、昭和五年にピークを迎えた。世にいう世界大金恐慌である。そんな年に私は鹿沼駅前、上野町に生まれた。

明治二十三年、宇都宮から日光線が開通し、鹿沼駅を利用する人が多かった。幼いころ、二階の居間が私の部屋で、祖母が昔話や絵を描くことなどを教えてくれた。母も時々同席し、おやつを持ってきてくれるのが楽しみだった。話が大人同士になると退屈し、二階の窓から通りを行きかう人々の姿を見ては、さまざまな思いをめぐらしていた。

昭和十一年、鹿沼尋常小学校に入学。その当時、日本が世界を相手取って大変な戦争へ突入しているなど、思ってもいなかった。それよりも、「あや」という6歳の娘が私の家にお手伝いさんとして来たことが不思議だった。そのころ、東北地方に大冷害があり、生活苦に悩んだ親が娘を働きに出し、契約金の前取りをして生活を支えていたのだと、後になって聞いた。人身売買だった。気の毒だと思った。



当時の鹿沼駅前の様子  
(中央奥が駅舎)

昭和十二年2月26日、東京で二十余名の将校は千四百名の兵士を率いて首相官邸や政府高官を襲い、彼らを殺傷、軍部を中心とする革新政権を樹立しようとした。この二・二六事件をきっかけに日本は軍事国家の道を進んでいくが、当時はそれほど惨めな未来が来るとは思わなかった。

昭和十二年7月7日、日本軍は中国、盧溝橋で中国軍と衝突、長引く日中戦争の発端となった。国の名目は東北農民救済とのことであったが、全国的な軍事国家をつくるためだった。国民総動員、国民皆兵と、戦争に必要な物資や労力を整えるための軍中心の政治に、思い通りの組織作りをした。しかし、やがて世界を相手取る泥沼戦となっていた。

昭和十五年、日本はイタリヤ、ドイツと同盟を結び、これに対し、アメリカは反対した。日本は「アメリカと戦うことに恐れなし」と言い、昭和十六年12月8日、アメリカと戦争することになった。

私は小学6年生だった。学校では、授業中に日本軍の勝利を教え、シンガポール陥落の

話など、面白おかしく、勇ましい話などを伝えた。そのたびに楽しかった。

次々と続く日本の勝利に、鹿沼の人たちも感動し、喜びの声をあげ、夜間、提灯をともして軍歌を歌いながら、長い行列を作って夜半まで練り歩いた。酒や菓子など、特別、町から配られた。これで日本は大勝利、国民は満足し、我も、我も、と軍隊に入る人が増えてきた。国は「赤紙」という召集令状を配り、20歳から45歳までの男子を強制的に軍隊に入れた。そのため、毎日のように鹿沼駅は軍隊に入る人でにぎわった。

軍隊に入る兵士は、まず今宮神社に行き、家内安全と自己の武運を祈った。見送り人は、身内、隣組、在郷軍人、友人、学生などさまざまな関係者が鹿沼駅で国旗を振り、軍歌を歌って見送った。にぎやかな行列だった。

その頃、出征兵士のために、皇軍慰問金を集め、兵士に送ることを使命とし、軍服を着、一日も欠かさず、お金を入れてもらうザルをもって、寺町方面から来られる高齢の男性がいた。子供心に偉い人だと思ったことを憶えている。

また、鹿沼駅では悲しい出来事が続く日もあった。戦死した軍人の遺骨が連日のように白い小さな箱に入って、身内の方や婦人会、または在郷軍人たちの胸にしつかりと抱か



神社で武運を祈る兵士と見送る人々\*



無言の凱旋\*

ていくのだろうと思った。

\*「戦争と日本人―あるカメラマンの記録―」岩波写真文庫（復刻ワイド版）岩波書店1953年発行より転載しました。鹿沼での撮影ではありません。

れ、電車から降りてくる。白い箱に入った数柱の英霊の無言の凱旋。かつて兵士を送ったにぎわいはなく、迎えに来た人たちのすすり泣く声が聞こえるだけ。子供のころ、そのような喜びと悲しみの風景を二階の窓から見ていた。この戦争で鹿沼では三千余名が戦死している。昭和十六年、13歳の私は鹿沼農商学校、商科に入学した。戦争は激しくなったが、どうやら一年は授業ができた。二年から軍需工場へ学徒動員で狩り出された。

昭和二十年、鹿沼の空にはアメリカの飛行機が飛びかい、焼夷弾が投下され、泉町付近で死傷者36名、焼失家屋256世帯。避難先の北小学校まで命からがら逃げこんだ。

日本軍はアッツ島で玉砕、軍艦大和沈没、特攻隊出陣、8月、広島と長崎に原爆投下。日本は敗れ、私たちは母校に戻った。

戦後、深刻な食糧難と物資不足のなかで、わずか18歳の私は、これから何を考えて生き